TOKUMA NOVELS

発行者　徳間康快
発行所　徳間書店
東京都港区新橋四ノ一〇　郵便番号一〇五
電話四三三・六二三一　振替東京四―四四三九二

高木彬光
狐の密室

Akimitsu Takagi ©1977

カバー　写真／鈴木彰　デザイン／集合ｄｅｎ
本文挿画　藤本　蒼
落丁・乱丁はおとりかえいたします

79E5e

TOKUMA

長篇本格推理

高木彬光

狐の密室

徳間書店

TOKUMA NOVELS

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

狐の密室——目次

第一章　宗教法人の調査……9
第二章　兄妹相姦の疑惑……19
第三章　三つの可能性……31
第四章　信じられない奇跡……41
第五章　龍良教本部……52
第六章　分裂の前兆……62
第七章　奇妙なドライブ……73
第八章　近江舞子の支部……85
第九章　雪の密室……97
第十章　不肖の息子の述懐……107
第十一章　凶器は美貌の尼のもの……119
第十二章　億分の一の確率の成功……130

第十三章　懶惰（らんだ）の城を訪ね来て……141
第十四章　神津恭介西へ行く……153
第十五章　還俗（げんぞく）の意志表示……163
第十六章　高天原の発掘……174
第十七章　分身の奇跡の真相……185
第十八章　特製毒入り蝮酒……196
第十九章　虎の威を借りる狐……206
第二十章　源九郎狐の出現……218
第二十一章　殺人事件の真相……226
第二十二章　この葉巻の燃えつきぬうちに……236
エピローグ……251

第一章　宗教法人の調査

「おれは悪魔に見はなされてしまったらしいな」

これが、私立探偵大前田英策の数年来の奇妙な口ぐせだった。

だいたい、日本では私立探偵といっても、外国のように犯罪にタッチする機会はほとんどないといってもよい。個人の地味な素行調査、小さな会社の信用調査、そんなところがふつうの業務で、対税務署的な感覚では、主たる収入源になっている。

もちろん、そういう調査をしているうちに多額の公金が横領されている事実がわかったり、たとえば会社の計画倒産といったような詐欺的犯罪が曝露したりするようなことも少なくないのだが、計画的な殺人事件にぶつかるのは、ふつうの私立探偵なら、一生に一度か二度、稀有の体験に違いない。

ところが、英策の場合には、以前はふしぎなくらい、殺人事件に縁があったのだった。ひどいときには一年に六件も、そんな事件にぶつかったことがあったくらいだが、ここ十年ぐらいはそんなチャンスもばったりたえてしまった。

だからこそ、彼も時々、妻の龍子をつかまえては、第三者が聞いたら思わず首をひねるような奇妙な愚痴をこぼすようになったのだった。

何といっても、幕末時代の有名な侠客、大前田英五郎の直系の子孫で、柔道と合気道の達人、女にかけても結婚前に美女千人斬りの悲願を達成したくらいだから、四十の半ばを越えても、ふつうの人間の三十代程度の体力気力は持ちあわせている。きまりきった常識的定石的な仕事の連続では精力の吐け口もないし、不満が累積して来たのもとうぜんのことだろう。

そこへこの「龍良教事件」が起ったのだった……

この事件にも、最初はたいした異常は感じられなか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

った。私立探偵の調査としてはたしかにかなり変っていたし、難しい仕事には違いなかったが、それが連続殺人事件にむすびつくことは、英策にもぜんぜん予想は出来なかった。まして、彼がいままで一度もぶつかったことのない密室殺人――「雪の密室」と言いたいような場面に自分で直面するとは、思いもよらないことだった……

英策が初めて「龍良教」という名前を聞いたのは、昭和五十一年十一月二十日のことだった。午前中はほかの用事で出かけていて、十二時すぎに事務所へもどって来た彼は、秘書格の留守居役、三谷慶子から、十一時ごろかかって来た電話の話を聞かされた。

「京都の室松産業という会社の社長さん、室松源右衛門さんとおっしゃるお方からお電話がありました。いま上京しておられて、『帝国ホテル』にお泊りになっておられるそうですが、なにか調査の御依頼のようです。直接八〇一号室へ電話をしていただけないかということでした」

報告はかんたんで要領がよかった。英策はすぐ「全国会社名鑑」「日本紳士録」そのほかの参考資料を持ち出して、予備的机上調査にかかった。

室松産業という会社は資本金二億で、本社は京都市中京区三条烏丸にある。資本金数百億の総合商社にくらべれば問題にも何にもならないとしても、昭和八年の創業というのだから、社歴もいちおう四十年を越えている。今出来の泡沫会社とはぜんぜん違っているといってよい。そして姓と会社名とが同じで、名前がちょっと古風な感じを持っているところから判断しても、室松源右衛門は先祖から代々のオーナー社長といったような人物だろうと思われた。

こういう資料によると、彼は京都市北区小山初音町に住んでいる。年は当年六十三歳、家族は妻の富美子と一男一女、前年度の収入は四億三千六百万を越えていた。

たとえ一社の社長としても、この収入はたいへんなものである。きっと先祖伝来、莫大な土地を所有して

いて、その一部を手離したのだろうと、英策はひとりで見当をつけた。

こういう厳正な資料の数字から判定したかぎりでは、その個人資産も数十億と見て間違いはないだろう。いわゆる「依頼者の信用度」についてはこれ以上確かめる必要もない。

これだけの資産家としたならば、そしてかりにその一族なり会社なりに、何かのトラブルが発生したとしたならば、当主としては、警察の手を借りないで、事を処理したいと考えてもふしぎはないはずだ。しかし、それがふつうの問題だったら、なにもわざわざ東京に住んでいる自分に調査を依頼する必要はないだろう。京都や大阪にも私立探偵はいくらもいる。全国的な組織を持っている探偵社もいくつか存在しているのに、なぜ自分をえらんで来たのだろうか？

それが、英策の最初にいだいた疑問だったが、本人にもあわずに一人でそんなことを思案していても、どうにもなるわけではなかった。彼は昼食時間の終ったころ、一時二十分に自分でホテルへ電話をかけて見た。

電話へ出て来たのは当人だった。声も六十三歳という年と思えないほど若々しかった。

二時からはほかの人と会う約束があるが、話は一時間ぐらいですむだろう。だから四時にホテルの部屋まで来てもらえないか、くわしい話はその時に——ということだったが、英策はそれもとうぜんだろうと思った。

忙しい事業家が、関西から東京へ出て来たら、連続的に何人かの人に会い、いくつかの用件を短時間で処理しようとするのは無理のない話だから……

そういうわけで、約束の四時ちょうどに、英策は「帝国ホテル」の八〇一号室を訪ねて行ったのだった。

ドアを開けてくれたのは、三十なかばの年齢と思われる美男子だった。部屋にベッドがないところから見ると、二間以上続いているスイート・ルームの応接間として使われる部屋なのだろう。

応接セットのテーブルの向うには、一見五十ちょっ

とぐらいにしか見えない、赤ら顔のふとった男が坐っていた。濃い八の字眉が印象的だった。足のどこかに故障があるのか、右手のステッキに力を入れて立ち上ると、

「大前田先生でいらっしゃいますね。室松源右衛門です。こちらは秘書の島崎敏男、お忙しいところわざわざお越しいただいて恐縮です。さあどうぞおかけ下さい」

とていねいに挨拶した。

「大前田です。失礼します」

英策は名刺の交換をすませると、坐り心地のよい椅子に腰をおろした。テーブルの上には、高級ウイスキー「シヴァーズ」の壜と、ミネラルウォーターと、氷と葉巻の箱がおいてある。

「先生は斗酒なお辞せずといわれておられるようですね。まあ、お茶がわりに召し上って下さい。私も痛みどめの薬のかわりに、少しぐらいはお相手します」

源右衛門は島崎敏男に眼くばせした。

「痛みどめとおっしゃいますと？」

「半年ほど前から、右膝の老人性変型関節症という病気にかかって、しばらく寝たきりだったのです。最近ではどうやら杖をついて歩けるようになりましたが、時々何かのはずみに痛み出します。今日も十時ごろからはじまりました。まあ、人間だれしも避けられない老化現象の一種で、死病にはならないそうですが、今年は寒さもひどそうですし、冬は相当苦労しそうですね」

「そうですか？　おたいへんですね。なにしろ今年は東北も冷害でひどかったようですし東京の夏も寒い日がありましたものね」

「異常気候は世界的だったようです。今年の夏にヨーロッパへ行ったうちの社員が、パリーではひどい暑さで、夜もろくろく寝られなかったとこぼしていました。それにイギリスでは水不足でたいへんだったようです。最近『氷河期来る』という本も出て、ベストセラーになっているようですが、いったいどういうものでしょ

うか？　彼は仏教的に『末世』と割りきっているようですがね」
「彼とはいったい誰ですか？」
「まあ、その話は後まわしにして、とりあえず乾杯いたしましょう」
源右衛門は笑ってコップをとりあげた。英策も一杯目は一口でかたづけて、
「ところで御依頼の御用件というのは、いったいどんなことでしょう？　まずそれをおうかがいしたいのですが」
と催促した。
「まあ、葉巻でもいかがですか？」
源右衛門は自分で箱をとりあげた。一本一本がアルミの筒の中に入っている。
「これはクウエスタ・レイという銘柄です。アメリカから買って来たのですが日本では市販されているでしょうか？」
「なるほど、珍しい味ですね」
英策が四分の一ほど吸って答えると、源右衛門は淡々たる調子で話をはじめた。
「さて、おねがいしたい問題ですが、実は密教の一派に龍良教という宗派があります。東京方面では名前も通っていないでしょうが、本部は滋賀県長浜市にあり、京都、大阪、大津、名古屋と近江舞子に支部があります。宗教団体としたならば、全国的なものではない田舎教団ともいえましょうが、関西ではかなりの勢力も持っている存在ですね。信者は十万以上と言いますが、これには掛値もあるでしょう。話半分として五万ぐらい――そう見ておけば間違いないんじゃないでしょうか？　先生におねがいしたいのは、この教団にからむ問題の調査なのです」
「ちょっとお待ち下さい。お話の腰を折るようで申しわけありませんが、密教というのはいったいどういう宗教でしょう？　仏教でしょうか、神道系の宗教でしょうか、まさかキリスト教ではなかろうと思いますが」

源右衛門と島崎敏男は、ちょっと眼を見あわせていた。

「わかりました。それでは話を進める予備知識として、ごくかんたんなＡＢＣ的なことだけを申し上げますから、それ以上のことは後で先生御自身がお調べねがえませんか？　私たちもいちおうのことは知っているつもりですが、専門家ではありませんし、間違った説明をして、先生に変な先入主をお与えしてもこまりますから」

「わかりました」

「仏教そのものは大きく分けて、顕教と密教と二種類に分れます。そしてこの密教を日本へ初めて伝えたのは、平安時代の有名な空海上人です。いやそれよりも、弘法大師といったほうがわかりやすいでしょうね。

彼とほとんど同時期に、最澄も唐へ渡って仏教の奥義を日本へ伝えたのですが、密教だけにかぎるなら、空海のほうがはるかに上だったのですね。ですから最澄は空海を師のようにあおいで教えを乞おうとしたのです。しかし後では仲が悪くなり、絶交状態になったといいますが……

この最澄が開いた宗派が天台宗、その総本山は比叡山にありますね。それに対して、空海のほうは真言宗の開祖で高野山を開き、晩年には京都の東寺を本拠として、広く布教を続けたのです。

それ以来、約千二百年近いあいだ、密教はそれなりの成長をとげて来たといえるでしょうが、伝来後三百年ほどたった平安時代の末期、紀元一一〇〇年ごろには、真言宗の中から、立川流といわれる分派が生れました。いまの地名でいうなら東京都立川市、そこに住んでいた陰陽道の専門家が、新しい教義を創り出したところから生れた名前らしいのですが、本筋の真言宗からは邪教と見なされて、たいへんな圧迫迫害を受けたようです。しかし、この一派の教えには、それなりのよさもあるのでしょう。仏教界で大勢力を張るというところまでは行かなくても、曲りなりに八百年以上、滅亡せずに存続して来たわけですね。そしてこの龍良

教はその立川流に属するというのです。
ここまでの説明はおわかりですか？」
「はい、どうにか……」
「今日のお話の前提となる予備知識は、この程度で充分だろうと思いますが」
正直なところ、英策もこのときはほっとしたのだった。ＡＢＣとはいわれたものの、問題が宗教に関することだけに、少なくとも最低三十分は、長々とお説教じみた説明が続くだろうと覚悟をきめていたのだから……
「ところで、この龍良教の教祖は池上弘澄といいます。姓はともかく名前のほうは、弘法大師と最澄の名前から一字ずつとっているでしょう。法名ですから自分でつけたことは間違いありませんし、その自負心の強さもよくわかりますね。しかし、人によっては大はったりとうけとるかも知れませんね。
年は私と同じ、六十三歳のはずですが、五十ちょっとにしか見えないという話です。教団の中では、活仏とか奇跡を実現できる聖人だとか言われているようですが、額面通りうけとっていいかどうかは疑問ですね。
彼の生れは琵琶湖の西岸、いまの地名でいえば滋賀県近江舞子の近くの雄松崎というところだったようです。いまでは国鉄湖西線も出来ましたから、京都から近江舞子まで各駅停車の電車で四十五分で行けますが、むかしはたいへん不便な場所でした……
貧乏な漁師の息子で、本名は池上太郎といったのですが、子供のころから予言の能力はあったようです。御承知かと思いますが、琵琶湖は一日の間でも、朝と晩とで天気が激変するようなことも珍しくはありません。ベテランの漁師たちでさえ、現代でも遭難がたえないのです。まして彼の子供のころ、大正初年ではとうぜんのことながら、科学的な気象観測も未発達だったはずですし、子供がぴたりぴたりと気象の変化を予言できたら、後世までの語り草にもなるでしょう。
小学校を終えて間もなく、彼は行方不明になったそ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com